様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０３２５６

研究課題名（和文）中年期にある親の青年期の子どもとの親子間葛藤解決プロセスと影響要因

研究課題名（英文）parent-adolescent conflict resolution process and its related factors

研究代表者
平石　賢二（HIRAISHI, KENJI）

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：８０２２８７６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では青年期の子どもをもつ親を対象にして，青年－両親間葛藤の経験のエピソードとそれに関連する諸要因を把握し，それらが生起するメカニズムを探索的に検討することを目的とした。自由記述による定性的データの分析の結果，青年－両親間葛藤は多様であり青年個人の要因だけでなく，親の要因や学校要因などの家庭外の社会的文脈の問題が背景にあることが明らかになった。また，親の親子間葛藤解決行動を測定するための新たな尺度を作成し，葛藤の原因帰属，養育態度，相互信頼感，親の夫婦関係などと親子間葛藤解決行動との関連を検討し，日常的な親子関係のあり方と葛藤解決場面における対処行動は強く関連していることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで日本における青年－両親間葛藤の実態については正確には把握されてこなかった。また，子どもを対象にした調査研究がほとんであった点が問題である。そのため，親の視点からみた青年－両親間葛藤の実態把握とそれが生起するメカニズムの解明，親の葛藤解決行動のあり方を明らかにしようとする本研究は青年－両親関係の研究に新たな視点を提示し，青年期の子どもをもつ親に対する有益な情報を提供できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine contents of parent-adolescent conflict, related causal factors in the process, and hypothetical causal mechanism by using parent's report. The results of a qualitative survey for parents with adolescent child showed that their experiences of parent-adolescent conflict occurred under diverse backgrounds including outside social contexts for family. Based on the qualitative survey, new scale for assessing parent's conflict resolution behaviors was developed. The relationship between parent's resolution behaviors, causal attribution to conflict, parental attitude, mutual trust with their adolescent, parent's well-being, parent's authenticity, the quality of marital relationship, and the work-family conflict were examined. As a result, the parental conflict resolution behaviors were strongly related to their daily parenting attitude and the quality of parent-adolescent relationship.

研究分野：発達心理学

キーワード：青年－両親間葛藤　親子間葛藤に対する原因帰属　葛藤解決行動　養育態度　中年期　青年期　夫婦関係　ワーク・ファミリーコンフリクト

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

青年–両親間葛藤に関する多くの研究は未だ青年個人の内的要因に焦点をあてることが多く，親の要因や親子の関係性の要因に関する検討が十分ではないのが現状である。また，社会的文脈としては親子関係や家族関係という家族の文脈内に限定されることが多く，家庭外の社会的文脈が親子関係に及ぼす影響についてはほとんど検討されてこなかったと言える。さらに顕著な青年–両親間葛藤の経験がないと報告する青年も決して少なくないことが明らかになってきている。そして，殆どの研究が青年を対象にして実施されてきており，親の視点からみた青年–両親間葛藤の問題は全く検討されてこなかった。

２．研究の目的

本研究においては，①青年期の子どもをもつ親は子どもとの関係においてどのような親子間葛藤を体験し，それをどのように解決していくのか，②親子間葛藤の解決プロセ スにおいて関与している中年期の発達課題に関連した促進要因，阻害要因にはどのようなものがあるのか，③体験される親子間葛藤には両親間で差があるのか，の３点について検討することを目的とした。具体的には以下の研究Ｉから研究Ⅲまでの３つの調査においてそれぞれの目的を設定した。

３．研究の方法

（1）研究Ｉ

調査実施方法および参加者：オンライン調査会社を通じて募集し，オンラインで実施した。調査時期は，2022 年 10 月である。調査に参加し同意が得られた青年期の子育て経験がある成人 828 名（性別：男性 416 名，女性 412 名）を分析対象とした。

調査内容：デモグラフィック変数および親子間葛藤とその解決プロセス（①最も印象に残っている親子間葛藤のエピソード，②親子間葛藤が生じた原因について，③解決に至るまでの経過，④親自身がとった行動など。

（2）研究Ⅱ

調査実施方法および参加者：オンライン調査会社を通じて募集し，オンラインで実施した。調査時期は，2024 年 2 月である。調査協力の同意が得られた中学生の子どもをもつ母親と父親（母親 465 名，父親 426 名）が参加した。

調査内容：①デモグラフィック変数，②養育態度：平石（2007）が作成した「思春期の子育て態度尺度」25 項目（主体性の尊重，威厳ある態度，不安定な態度，適切な心理的距離の 4 下位尺度），5 件法を使用。③子どもの成長に対する認知と感情：平石（2007）が作成した「子どもの成長に対する認知・感情尺度」20 項目（肯定的な認知と感情，否定的な認知と感情の 2 下位尺度），5 件法を使用。③親子の相互信頼感：渡邉・平石・信太（2009）が作成した「子どもの母子相互信頼感尺度」の短縮版 6 項目，5 件法を使用。④中学生の子どもとの親子間葛藤（親子間葛藤のエピソード自由記述の質問 1 項目，親子間葛藤の原因帰属　質問 1 項目（5 つの選択肢について強制選択），親子間葛藤のエピソードに対する心理的ストレスの度合い　質問 1 項目 4 件法），⑤親子間葛藤の解決行動：研究Ｉで新たに作成されたオリジナルな尺度 42 項目（消極的な行動，子どもに対する働きかけ，親自身の認知と情動の調整，親子の関係性の改善，第三者の援助を求める，などの内容から構成）5 件法。

（3）研究Ⅲ

調査実施方法および参加者：オンライン調査会社を通じて募集し，オンラインで実施した。調査協力の同意が得られた中学生の子どもをもつ母親と父親（母親 452 名，父親 423 名）

が参加した。
調査内容：①デモグラフィック変数，②中学生の子どもとの親子間葛藤（親子間葛藤のエピソード　自由記述の質問 1 項目，親子間葛藤の原因帰属に関する質問 1 項目（5 つの選択肢について強制選択），親子間葛藤のエピソードに対する心理的ストレスの度合いに関する質問 1 項目，4 件法，親子間葛藤の解決行動，研究Ⅰで新たに作成されたオリジナルな尺度 42 項目（消極的な行動，子どもに対する働きかけ，親自身の認知と情動の調整，親子の関係性の改善，第三者の援助を求める，などの内容から構成），5 件法。③精神的健康状態：WHO が開発した WHO-Five Well-Being Index(WHO-5)の日本語版 5 項目，6 件法を使用。（岩佐他，2007）④本来感：伊藤・小玉（2005）が作成した「本来感尺度」7 項目，5 件法を使用。⑤ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度：金井（2002）の尺度に，加藤（2010）が項目を追加して新たに作成し直した「ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度」17 項目，5 件法を使用。⑥夫婦の愛情：伊藤・相良（2012）が作成した「夫婦の愛情尺度」16 項目，4 件法を使用。

４．研究成果

（1）親の視点からみた青年–両親葛藤の内容と背景，原因の認知（研究Ⅰ）

①青年–両親間葛藤のエピソードのカテゴリー分類：記述された葛藤エピソードの内容は，子どもの問題，親の問題，親子の関係性の問題，その他に大別できた。子どもの問題には子ども個人の性格や問題行動，反抗期であるという認識，子どもの家庭内での行動，学校での問題など非常に多くの異なった問題から生じているエピソードが存在し，多くの下位カテゴリーが認められた。これらの結果より，青年–両親間葛藤は実に様々な状況で生じていることが示唆された。また，親子間葛藤がないと回答した人の割合も大きく，青年–両親間葛藤は青年期発達において必然的に生じる現象ではないと言えるかもしれない。子どもの問題の下位カテゴリーで注目すべき点としては，学習や成績，進路選択など学校関連のエピソードと子どもの不適応や問題行動に関連した葛藤エピソードが多いことである。これらは従来の青年心理学において指摘されてきた青年の自我や自律性の発達とは別の生起メカニズムを考える必要性を示唆している。

②青年–両親間葛藤の原因のカテゴリー分類：葛藤エピソードの原因についての分類には，外的帰属（子どもの要因と家庭内の親子関係以外の要因，家庭外の要因）と内的帰属（親の要因），そしてその両方である関係性の要因としての認知が認められた。興味深いのは「反抗期」または「思春期」だから，という原因帰属である。これらの回答の多くはそれらが示す具体的な内容に言及しておらず単なるラベルだけで理解しているように窺われた。また，エピソードの分類結果でも確認できたが，学校や親の仕事と経済的問題など親子関係，家族関係の問題ではない外的要因を挙げる人も少なくなかった。以上のことより，青年–両親間葛藤が生起するメカニズムに関しては，子どもと親の個人的要因に加えて，様々な社会的文脈の状況要因を考慮してモデルを構築していく必要性が示唆された。

（2）青年–両親葛藤を解決するための親の対処行動（研究Ⅰ，研究Ⅱ，研究Ⅲ）

①親による青年–両親間葛藤解決行動（研究Ⅰ）

回答の分類：研究Ⅰの自由記述調査によって収集された親の青年–両親間葛藤を解決するためにとった行動に関する回答の内容について KJ 法を参考にしてカテゴリー分類を試みた。その結果，葛藤解決行動は，子どもに関わらない自分自身の行動と情動を制御する方略，子どもに働きかけ子どもまたは関係性の変容を目的とする行動方略，家族以外の第三者に働きかける行動方略，なにもしない方略などに分類できた。

葛藤解決行動尺度の項目作成：続いてこれらの回答の中から特に重要と考えられる項目を抽出し，親の葛藤解決行動を測定するための尺度作成を試みた。その結果，尺度項目は大別して，消極的対処行動（特に何かを行わず待つ姿勢 6 項目）と積極的対処行動（対自分〔親自身の認知的，情動的，行動的調整〕10 項目，対子ども〔要求性 10 項目，応答性 10 項目，相互交渉 6 項目〕）から構成される合計 42 項目の尺度を作成した。

②親子間葛藤解決行動尺度の因子構造および下位尺度の信頼性の確認（研究Ⅱ，研究Ⅲ）

尺度の因子構造：まず始めに研究Ⅱのデータを使用して，親子間葛藤解決行動尺度 42 項目の因子分析（最尤法–プロマックス回転）を行い，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性の観点から検討した結果，4 因子が妥当と判断した。続いて研究Ⅲのデータを使用して同じ分析を試みた結果，ほぼ同じ因子構造が確認された。第 1 因子に負荷量の高かった項目は，子どもを信頼する，子どもの意見や考えを尊重する，子どもに寄り添い一緒に考えるようにするという行動などで「積極的対処行動」と命名した。第２因子に負荷量の高かった項目は，子どもの問題点を指摘する，子どもに自分の考えや気持ちを伝える，子どもに考えや行動を改善するように求めるという行動などで「要求的対処行動」と命名した。第３因子に負荷量の高かった項目は，子どもに干渉しないで距離をおくようにする，仕方ないと覚悟をきめる，あきらめるなどであり「消極的対処行動」と命名した。最後に第４因子に負荷量の高かった項目は，本などを読んで学び，子どもの気持ちを理解できるようにする，子どもに感謝する，色々なものを調べ，役に立つような情報を集めるなどであり「認知的推敲対処行動」と命名した。研究Ⅱのデータを使用して各下位尺度の信頼性係数（クロンバックのα係数）を算出したところ，積極的対処行動尺度.95，要求的対処行動.86，消極的対処行動.81,認知的推敲対処行動.75 でありいずれも十分な値を示していた。

（3）葛藤解決のための対処行動に関連する要因

①葛藤の原因に対する認知（研究Ⅲ）：親が認知している青年–両親間葛藤の原因は，子どもの問題（44%），親子双方の問題（44%）の 2 つが多く，親の問題（6%）と家庭外の問題（3%）が原因とする認知は少なかった。原因帰属の認知の違いと親子間葛藤解決行動得点との関連を分散分析および多重比較によって検討した結果，要求的対処行動得点においてのみ原因帰属の群間に有意差が認められ，親子間葛藤の原因を子どもの問題と認識している場合には他の原因帰属の群よりも有意に要求的対処行動得点が高いことが示された。

②養育態度と子どもの成長に対する認知・感情（研究Ⅱ）：親の養育態度および子どもの成長に対する認知・感情と親子間葛藤解決行動との関連についてそれぞれの下位尺度間の相関係数を算出した。その結果，特に顕著な結果としては，積極的対処行動と主体性の尊重，威厳ある態度，適切な心理的距離，肯定的認知･感情の間に有意な正の相関（父母：.41～.63）が示された。また，要求的対処行動は威厳ある態度と有意な正の相関（父：.32，母：.41），消極的対処行動は適切な心理的境界と有意な正の相関（父：.36，母：.40），認知的推敲対処行動は主体性の尊重と有意な正の相関（父：.37，母：.28）が示された。これらの結果より，葛藤場面での対処行動は普段の生活における両親の子どもに対する態度と関連があることが示唆された。

③相互信頼感（研究Ⅱ）：親子の相互信頼感と親子間葛藤解決行動との関連について相関係数により検討した結果，相互信頼感は 4 つの葛藤解決行動のすべてと有意な相関関係にあることが示されたが，積極的対処行動と最も高い有意な相関（父：.65，母：.61）を示した。逆に最も相関係数の低かったのは，消極的対処行動（父：.21，母：.13）であった。これらの結果から特に親子が相互に信頼し合っていると親が認識していることと親子間葛藤解決

行動は関連していることが示唆された。
④心理的 well-being と本来感（研究Ⅲ）：父母の心理的 well-being と葛藤解決行動との関連について相関係数により検討した結果，心理的 well-being と積極的対処行動（父：.27，母：.23），認知的推敲対処行動（父：.25，母：.17），要求的対処行動（父のみ：.17）との間に低い有意な正の相関関係が認められた。

次に父母の本来感は心理的 well-being と比較的高い正の相関関係（父：.59，母：.65）に心理的適応の指標としてみなすことができるが，本来感と葛藤解決行動の関連については上記の心理的 well-being と類似した結果を示していた（積極的対処行動〔父：.29, 母：.32〕，認知的推敲対処行動〔父：.15，母：.17〕，要求的対処行動〔父：.21，母：.10〕）。

これらの結果より親の心理的適応状態は親子間葛藤解決行動と無関係ではないが部分的で関連は弱いことが窺われた。
⑤夫婦関係（夫婦の愛情）（研究Ⅲ）：父母の夫婦関係（夫婦の愛情の高さ）と親子間の葛藤解決行動の関連について相関係数により検討した結果，父親の夫婦の愛情の高さとすべての葛藤解決行動（積極的対処行動：.19，要求的対処行動：.22，認知的推敲対処行動：.19，消極的対処行動：-.12 と低い有意な相関関係を示していたが，母親の夫婦の愛情の高さは，積極的対処行動（.14）と認知的推敲対処行動（.11）の 2 つのみが有意な相関関係を示していた。このように父母で夫婦関係と子どもとの葛藤解決行動との関連は父母で異なる可能性があるが，いずれも関連は強くはなかった。
⑥ワーク・ファミリーコンフリクト（研究Ⅲ）：ワーク・ファミリーコンフリクトと親子間葛藤解決行動との相関関係については，父母共に積極的対処行動，消極的対処行動との関連は無相関であった。他方で，認知的推敲対処行動は，父親では 3 つすべてのコンフリクトと弱い有意な正の相関（.11～.18）を示し，母親では家庭から仕事への影響のコンフリクト（.17）と仕事から家庭への影響のコンフリクト（.21）で弱い有意な正の相関を示していた。さらに母親の要求的対処行動は，家庭から仕事への影響のコンフリクト（.14）と時間葛藤（.15）と弱い有意な正の相関を示していた。これらの結果より，親のワーク・ファミリーコンフリクトは親子間葛藤の解決行動と無関係ではないが関連性は強くはないこと，父母の間では異なる影響がある可能性が示唆された。

（4）本研究の成果と今後の展望

本研究の最も重要な成果は，青年–両親間葛藤のエピソードの多様性を記述し，その背景にある様々な要因を明らかにしたことである。また自由記述による定性的データの分析により得られた仮説モデルの提唱に留まらず，親子間葛藤解決行動を測定するための心理尺度を開発し，定量的研究により様々な要因との関連を実証した点が成果として挙げられる。既に述べてきた通り，青年期の親子関係における対立，葛藤の研究はほとんどが子どもの視点からのものである。そのため，本研究は従来の青年心理学研究の範囲を超えた親の成人期発達課題との関連も含めた知見を見いだすことができた。

しかし，本研究には限界と今後の課題も多く残されている。本研究においては，最も印象に残っている青年–両親間葛藤のエピソードを 1 つだけ回答してもらっているため，回答者によって想起される内容は異なり統制されていない。また，親の内的な葛藤と親子間葛藤を区別していない。開発した親子間葛藤尺度の因子構造についても，これまではすべての項目を一括投入して因子分析を行っているが，親の対自的対処行動と子どもに対する対他的対処行動を別々に分析することも必要である。さらに，両親と子どもの三者のデータの分析や縦断調査も今後の研究課題であると考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 平石賢二
２．発表標題 親の視点からみた青年－両親間葛藤とその解決プロセス
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 平石賢二
２．発表標題 親の視点からみた青年－両親間葛藤とその原因の認知
３．学会等名 日本発達心理学会第35回大会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関